

ドイツ演劇書収集家 毛利高範



毛利高範

現代では速記は国会などごく一部で見られる程度だが、複写機や録音機が存在しなかった明治大正時代には広く用いられた。各種の速記関係の図書や雑誌が出ていることでも分かる。毛利式速記術の考案者・毛利高範はその発展に寄与した一人として我が国の速記の歴史に名を留めている。しかし知る人は少ないが、彼は熱心なドイツ演劇書の収集家でもあった。『毛利高範侯旧蔵洋書（独文）目録』（佐伯市教育委員会、1991年）を編いた人は、ドイツ文学書、中でも演劇書の多さに驚くであろう。冊数575、全体の8割を占める。

毛利高範^{たかのり}は1867年（慶応2）12月5日、肥後宇土藩主細川行真の第2子として生まれた。幼名を侃次郎（なおじろう）といった。叔母の美女子（なおこ）が大分県佐伯藩主12代毛利高謙の後妻になったことから佐伯入りし、高謙の養子となった。だが廃藩置県により高謙は佐伯を去り東京に移住したので、侃次郎も幼少時代は東京で育った。そして明治9年7月高謙が没したのに伴い、同年9月11日を以てその家督を相続した。だが侃次郎が年少のため後見人に華族従五位京極高典をたてた。

毛利侃次郎は明治10年5月14日東京府韃靼絵学校で下等小学第3級を卒業したが、その時東京府庁から優等賞を貰っている。次いで創立間もない学習院に入学した。『学習院第一年報』（自明治10年至同年12月）には男子小学生名簿に毛利侃次郎の名が見える。以後『学習院年報第十学年』（自明治19年至20年8月）までの中で第七年報を除いて、すべて毛利侃次郎或いは毛利高範の名が見える。ただし、第10年報では高範は他所修学生欄に記載されている。

（明治13年9月11日、侃次郎は高範と改名した。同年9月7日の改名願によると、佐伯藩主毛利家が代々用いている高の字を取って高範に改名したい、と願い出ている）

第七年報だけ名が確認されないのは、その1年だけ独逸学協会学校へ行ったからのようだ。根本なつめ「毛利高範（細川侃次郎）略伝」（『宇土市史研究』第14号）によると、明治18年2月18日付で学習院長宛の入学願いがあり、同年2月24日付で独逸学協会学校宛での退校願がある。「私儀今般宮内卿ヨリ御達之旨ニ依リ学習院へ致入学候ニ付致退校度此段及請求候也」と、学習院へ入学したので独逸学協会学校は退校したいと願い出ているのである。

独語教育の面から当時の学習院と独逸学協会学校を比較すると、前者にあつては明治17年9月から漸く英語、仏語に独語が教科として加えられた（『開校五十年記念学習院史』）のに対し、後者は明治16年の創立以来、何よりも独逸学の教授を目的した半民半官的性格の学校であつて、スタッフ、カリキュラム、教科書などいずれの面でも前者より充実していた。それで高範が華族でなかったら（彼は明治17年7月8日付で、19歳にして子爵を授けられ華族に列せられた）学習院に戻ることなく、独協での勉強を続けたのではあるまいか。なお、学習院では明治19年9月に明治時代の代表的独語学者の一人である大村仁太郎が着任している。

いずれにせよ1年間にせ独協で学んでいることは、高範がドイツ語に熱心に取り組んでいたことの証拠であり、既にドイツ留学の希望を抱いていたようだ。それを窺わせる資料がある。

高範は学習院に復学しても、前述のようにその第10年報には他所研修生となっているが、根本論文によると、明治20年1月18日付の休学願とそれに続く同年12月15日付の正式文書「為海外留学予修欠席御願続」が学習院長大鳥圭介宛に出されている。その間師事したのは慶應義塾寄宿李国人フォン・スノロット及び内務省4等属北川俊、内務属大井和久であったという。慶應義塾に寄留していたというスノロットなるドイツ人は如何なる人物か。『慶應義塾五十年史』（明治40年）を参照したが特定できなかった。北川俊と大井和久はいずれも独逸学協会々員であり、特に大井は明治16年に旧東京外国語学校独語科を卒業した実力者であった。卒業後はその語学力を買われ、内務省内に置かれた警官練習所においてドイツ人教師の訳官を務めた。

このように高範は明治17年独逸学協会学校に行き、以来約4年間、海外留学に備えドイツ語を勉強していたのである。前記洋書目録には、高範がドイツ語を学ぶ過程で用いたと思われるヘステルス読本、ボック読本、ヴェルテル万国史、ヴェーベル万国史などの教科書も見られる。辞書ではF.A.Weberの独語辞典やF.W.Thiemeの独英辞典を用いたようだ。これら以外に洋書目録の「まえがき」（和田達宣）によると、佐伯市には平塚定二郎『独逸文法階梯』前・後編（独逸学協会、明治16・17年）や風祭甚三郎纂訳『独和辞彙』（後学堂、明治16年）も残されているという。

これらの教科書や辞書は明治10年代後半から20年代始めにかけて広く使用されたものであった。なお、ヘステルス上級読本には短いものながら75人の作家の文章を載せていたので、高範はドイツ語学習の過程でドイツ文学に関する知識もかなり得たであろうし、興味も覚えたであろう。学習院長宛の休学願にも文学修行のためとあるのもそれを物語っている。洋書目録には速記関係の本も2種あるが、刊年から判断して留学中に購入したものと見てよい。当時は速記よりも文学の方により興味を覚えていたようだ。

明治21年（1888）4月4日に毛利高範は宮内大臣土方久元宛に洋行願を出した。これは後見人・京極高典と実父・細川行真（いずれも子爵）を加え3人連名でなされた。内容は「兼ねて海外留学の志望を学習院へ伝えそのため予修中であつたが、今回独逸国へ留学したいので5月より24年4月まで3カ年暇を頂きたい」というもの。かくして高範は明治21年5月8日ドイツ留学に出発した。

毛利のドイツでの動静は殆ど不明である。最初ライプツィヒに滞在したようだが、その後は杳として知れない。ドイツの学習院に当たるボン大学の文書館に照会してみたが、同大学には正式な学生としても、聴講生としても在籍した記録はないという。毛利は帰国後、速記術に関する本を数冊出しているが、序文等で自分の過去を語ることはなかった。Miachael Rauck 編著『ドイツ語圏におけるの日本人の名簿』（1865-1913）に採録されていないところをみると、正式な学生として大学に登録することはなかったのではないか。（聴講生として学んだ可能性はある。）だがいずれにせよ、彼はドイツ滞在中に速記を学び、ドイツ演劇書を収集したことは間違いないし、劇場にも度々出かけたことだろう。またその演劇書の膨大な量からして彼には旧佐伯藩主として資金が豊富であったと推察される。

明治24年4月27日仏国汽船シドニー号で帰国した。そして宮内省式部官に登用され宮中に奉仕する栄誉を与えられた。その期間は宮内庁の記録では、明治24年12月28日式部官（叙9等）に任命され、同26年3月3日依願免本官となっているので、わずか1年3カ月で終わったこと

になる。

その後佐伯に帰り、明治40年頃まで居住した。この間毛利一家は一町民としてつとめて庶民と親しく交わり、一方では旧藩主として文教を進め、産業の振興に努めた。佐伯では自ら私立鶴谷学館でドイツ語教えたようである。鶴谷学館は明治23年に毛利家の資金により青年子弟に中等教育を授けるために設立されたものである。佐伯藩史料の中に「金銭月謝ジャーマンコース控帳」(明治27年1月)が残されている。受講者の名前も記されていて、関谷順、尾間明、薬師寺徹、長田稻置、国木田収二、山口行一、その他の名がある。ちなみに、国木田収二は独歩の実弟である。独歩は当時鶴谷学館の英語教師をしていて弟と共に佐伯に滞在していた。

明治40年9月高範一家は子女(2男5女あり)の教育のために東京に転居した。その後はドイツ留学中に習得した速記術を工夫改善し、ついに毛利式速記術を完成した。その造詣の深さは華族界にあって異彩を放った。自ら設立した毛利式速記学校の校長を勤め、大正2年以後貴族院議員に2回当選した。

さて、そもそも毛利高範とドイツ演劇の接点は何処に求められるのか。渡独前に学習院や独逸学協会学校でドイツ語を学ぶ過程で教科書を通じてドイツ文学の知識を得た可能性があることは既に指摘した。もう一つは久松定弘(1857-1913)の『独逸戯曲大意』(明治20年)を読んでもその影響を受けたことも考えられる。該書はドイツの演劇を日本で最初に紹介した本だ。注目すべきは久松が明治7年から10年まで私費でドイツに留学し、ベルリン大学でオイゲン・デューリングに師事し哲学を学び、又興味から文学を学んだ旧今治藩主であって、毛利高範と身分を同じくする人物だったという点である。

しかし、久松定弘と異なり毛利は、筆者の知る限りドイツ演劇に関する著書や論文を発表していない。ひたすら収集することに興味があったらしい。その点では純粋な収集家であったと言える。従って日本におけるドイツ文学研究史には彼は登場しない。

しかし考えてみると、当時の華族には久松や毛利に限らず、近衛篤磨、大久保利武、長松篤栞、亀井茲明などドイツ文化に傾倒し、その移植に努めた人々が少なくない。華族という身分のために、堅実で重厚なドイツ文化を好むことに繋がったのだろうか。

ところでドイツ留学中の状況とか、演劇書収集の目的・方法など今まで不明なことが、そのドイツ蔵書を調査すれば何か手がかりが得られるのではないかと思う。だが残念ながら、現在蔵書は佐伯市教育委員会が管理し、文化会館に保管されているが、非公開になっている。近い将来それが公開され、研究者や一般の関心のある人たちが自由に閲覧できるようになることを望みたい。

毛利高範は1939年(昭和14)6月12日、東京都柏木の自邸で病気のために亡くなった。享年74。芝高輪の東福寺の毛利家墓地に葬られた。戒名は速記院殿開新高範大居士であった。